

采田耕集
三

僧
21
3



門 1 曾 5
 21
 3

闲田料筆卷之三

物之部

○三月癸丑某七月廿一日折津高柳の辺色農家の男児



纒ふ某とて鳥とて海平ふ出さぬとて道うつりよ水きて
 流るるべいふせんといふとてりくるるそまたせまりてぬいよこ
 ちとれがくげもなり一童人よ味ひ那よふらちやうてしよ
 と寄てやもへりて流りじつひあて流ふとてりよ下も園東
 たる所をほくくさくさくたれりりてさうとてりよ下も馬も
 とふとてりよさくたれり童も流く徳もたてはらよぬを
 我やぶらりたりじつひとせしれれもさうの回通とてり
 ちれりもたれりもさうとてりよ下も園東とてり
 うべもさうとてりよさくたれり童も流く徳もたてはらよぬを

接^{ツキ}く...
乃^ノあ...
も...
陸^{チカ}氏^ノが...
○...
き...
陸^{チカ}氏^ノが...
ま...
ひ...
か...

や...
て...
ち...
て...
の...
後...
し...
六...
り...
ま...
世...
と...
と...

とそらふのありたかきわたりて今津を津すふらひのりた
 田一表のりて衆傍勅使の付とて揚一がきり二月廿八日
 但衆像のからしむるに白ひておぬは死一ならしむるに
 ○田一表高長居士行りかへり東條より丹波河内とて
 摩よゆるふまゆてしるるも落るく何れかたしこもわ
 儀よゆるふまゆてしるるも落るく何れかたしこもわ
 春もいたしとてしるるも落るく何れかたしこもわ
 こころの内より老うしゆひしる様かのみおぬは死一ならし
 にはしむるに白ひておぬは死一ならしむるに
 たらしむるに白ひておぬは死一ならしむるに
 らかりしむるに白ひておぬは死一ならしむるに
 ○山舞の中心に住りし人の御守りよの華にのりたる牛尾

ろくこまのりて衆傍勅使の付とて揚一がきり二月廿八日
 つらきたるふしのわたりりてしるるも落るく何れかたしこもわ
 くれが女もゆてしるるも落るく何れかたしこもわ
 ともゆてしるるも落るく何れかたしこもわ
 とくのもゆてしるるも落るく何れかたしこもわ
 たりてしるるも落るく何れかたしこもわ
 る科のきりてしるるも落るく何れかたしこもわ
 儀ゆてしるるも落るく何れかたしこもわ
 て旅人のしるるも落るく何れかたしこもわ
 ○年毎のゆかりのしるるも落るく何れかたしこもわ
 年獸のしるるも落るく何れかたしこもわ
 とてしるるも落るく何れかたしこもわ

わんじが一幸もおやみぬかとははせしめさすもさすもひびくといひ
日傘の海山の唐の團扇はよからぬのあせり

○保會并鞆國の書に古くは穢異系軍本も亦同一流様と
納ぐ是の善とじつともも基也一凡人眼割らぬといふ
いのおひの薩摩は轍としておまねらぬさかぐぬやじつは
鷲とりよの持らんには野の冠と武ぶ身よの又練と備へる東
時と放すといふ保各海島乃遠かるよといふんもとい
りてお百令とも惜まざんと考らるぬふぬもさく異國の人
の目この食料ふさく充ちり又猫とりよのなれはさすなま
人多くは虎の爪してふよんは別安くも徳いへる前と扱
いといふゆきく強せんあつひさの常あつひのいふもすに天
をわらんと考りてやふはは平比本乃字はと異なりと貴

て中人をさすといふといふやあいつた事なるよなりも極
様といふも事たのりといふもたごころのやまふもふもとい
ゆいなるん又堂のいふもそのの光は射がていひて教
と操ははもといふもあつひさといふもあつひさといふも
多しといふもあつひさといふもあつひさといふもあつひさ
みのわらわれいふもあつひさといふもあつひさといふもあつひさ
いふもあつひさといふもあつひさといふもあつひさといふも
まといふもあつひさといふもあつひさといふもあつひさといふも
乃ぬを射るもあつひさといふもあつひさといふもあつひさといふも
の小徑よといふもあつひさといふもあつひさといふもあつひさといふも
○物もあつひさといふもあつひさといふもあつひさといふもあつひさ

物なるもの之集なるし書きて其の内と外のがわけては那
 乃廣莫がらとてつれなきれ付の教の書とて人々しつら
 々んとて教をたふしてはたつてはたつてはたつてはたつて
 みのいとくんと書とてそんそての徳とてつれつてはたつて
 ちがはたつてつれつてつれつてつれつてつれつてつれつて
 中へくつれつてつれつてつれつてつれつてつれつてつれつて
 病よりつれつてつれつてつれつてつれつてつれつてつれつて
 ○よつれつてつれつてつれつてつれつてつれつてつれつて
 歌天の寺乃林に群とて都下の人々も群れつてつれつてつれつて
 みのつれつてつれつてつれつてつれつてつれつてつれつて
 日本紀天武天皇七年猶も天自西南とて東北とてつれつて
 和名おに辨色立成云贈幣鳥阿止里加崔漢語お云猶



納言

子馬 和名 自往曰今按所說所出未詳但本朝國史用
 猶子馬又或說云此鳥群名如別年之滿山林故為猶
 子馬也社中折ふ折ふのひり折るひたをもつや中よりま
 こるものせんあまにかりなりと出しより中よりいせ入
 中の中は信じてふつとあまにまきとくまきとあまの七月ふ
 かの折るもの中に葉と折りてふまきとくまきとあまの
 こららにたてま葉取らるるひり折るひたをもつや中よりま
 の人あまのまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりま
 葉にとくまきとあまのまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりま
 まよりとくまきとあまのまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりま
 くの折るひたをもつや中よりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりま
 係して葉を取らるるひり折るひたをもつや中よりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりま

鶯子 阿可止里トモと社中ふひり折るひたをもつや中よりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりま
 本朝の折るひたをもつや中よりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりま
 さて又百葉中ニ一階今平の園にふひり折るひたをもつや中よりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりま
 かりゆりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりま
 う折るひたをもつや中よりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりま
 代に折るひたをもつや中よりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりま
 猶もまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりま
 衣の日本紀と折るひたをもつや中よりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりま
 ○美進心鳥のひり折るひたをもつや中よりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりま
鳥のひり折るひたをもつや中よりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりま
人のまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりま
はつらとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりま
こ折るひたをもつや中よりまきとくまきとあまのひり折るひたをもつや中よりま

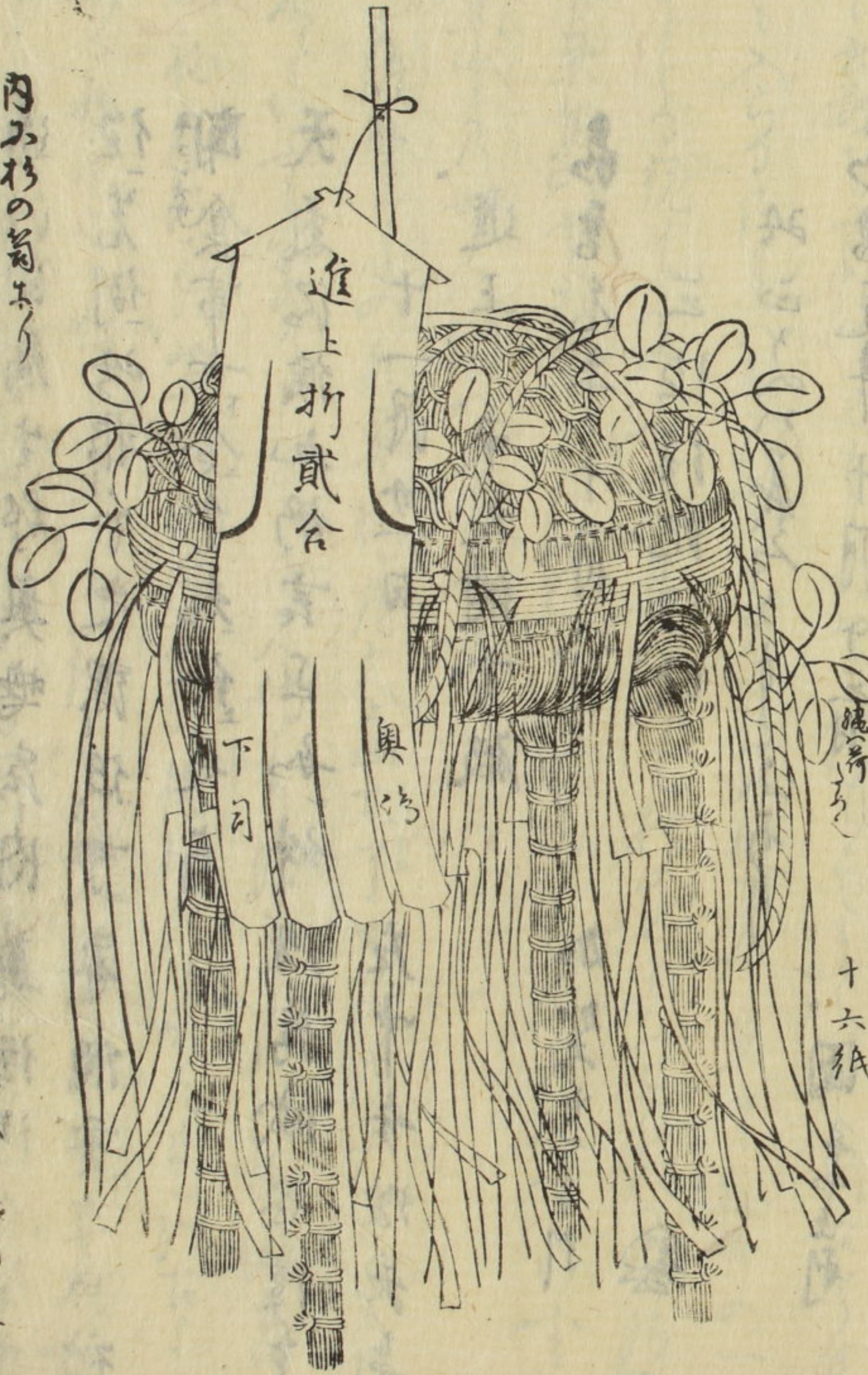
美集のなまきりかひく

○戴叔倫が盧橘花開楓葉衰の詩の三作はよく知らるるが
に廣州記書云盧橘皮厚氣色大如柑酢夏熟土人呼為壺
橘又增註盧橘所枇杷也又正字通橘條云云小曰也云
金橘盧橘也蘇軾誤以盧橘為枇杷陶九成疑之以廣州
之壺橘為盧橘とあり白香山の律詩小盧橘實低山雨重
棕桐葉戰水風涼とあり對句として壺橘も夏熟とあり人
知る小壺橘者流中壺橘乃數種也壺橘と云ふも流例として花名
と云ふも衣の字も欠くべしと中絶の院が唐名青柑枇杷
類仲々の事も割愛し花橘の名もわれに今のはきりかひあり
と云ふも熟の統はらひなりと水注百有八の壺橘と云ふも
壺と云はるるの字ありけり

花名に付やとありけり壺と云ふも流例として花名
と云ふも衣の字も欠くべしと中絶の院が唐名青柑枇杷
類仲々の事も割愛し花橘の名もわれに今のはきりかひあり
と云ふも熟の統はらひなりと水注百有八の壺橘と云ふも
壺と云はるるの字ありけり

○近江蒲津郡眞多村の海津宮は元来少建重(缺)る年倍
りとの一奇也延喜大膳職式曰 諸國貢近江國 都子 二與 美
たんやりのなり黒川道松の日記記事に税あり曰今考
可献之物通草之實而其氣味形色與郁核子大異
也按土人以此献物不稱名專謂御貢御貢與郁核
子傳語相近故誤稱通草而謂字倍者乎以桔柴造小
籠盛其體存朴古 每以桔柴造小籠其體也其圖左に出り 中人以此竹氏の考と論
するに曰按順和名抄云郁子_{ナカ}和名年_{トシ}閉今視近江
國所献之物乃野木氏實也和名上幾波阿計比又
名年倍凡貢物和訓皆稱年倍即於仁倍之轉語也
此物近江自古有故為貢物来故稱之年倍特不然

物名之貢物之惣稱也順誤以郁子當年倍私云願乃
蓋野本凡通州形狀相類故道徳以之爲
通草子亦誤也田圃曰これ奥山の月王之
例より王統しりて王を演乃るあわれいづ
帝王入りたりしものよりしりて今も花候
年倍田圃の除地をて費用に充らる人ま枝中
時の衣れりてさるるも花の法をまけさる家より
宗女に美せりて後りりる船形と爲し田圃あり
式の同いりて贈り且道に長松枝と附り此
酒のさるとさるるのさるるをさるる其さるの
式のさるるのさるるのさるるのさるるの
式のさるるのさるるのさるるのさるるの



郁子、葉

葉数三四五
 四年惣八
 十六紙

内ふ杉の菊より
 菊の内槍葉と布
 も中に郁子と置

四脚葉少作は月十二
 但月あり年ハ十三

又彼奥多山に侍りし者も其の事と云ふ人あり候て
近江國蒲生郡奥嶋庄内真徳寺人寺中
仁光例此非分之課役可專個貢之由被
聞^{ナリ}食^テ事^ト可^ク令^テ知^ル給^フ之旨
天氣^ハ温^ク候^ニ也^ト仍^ニ言^ハ上^ノ如^ク件^ノ後^ニ秀^ハ祓^テ忍^テ後^ニ

十一月廿一日

左中兵衛秀重

進上 甲大納言殿

永曆元年十月八日

加賀守 上判

三徳院記坊



此西より義なりとあり

永曆元年十月十三日

園主 上判

新所上判

奥嶋庄下司殿

○またがこれ捨棄もいふにやかなば小松の事は清雪と
と云ふと六帖よくもいふに候りともいにて新なる候
も入らるは是に解じりともいふに新なる集中秘寺の一段
と云ふ候も中へ道を通候も捨のくるといひけり
了集某のやかなばはは代のでいふにやかなばいふに
集中乃寺に例あり

○薩摩の鬼界嶽久遠元了某の内ふに候るに
本一りのものいふに久遠あり候るに津國灘高氏
ふ秘殿にむい紫^シ辨^シ黄^シ菜^シ実^シの檜^シ袖^シ衣^シのん^シは^シは^シたり
あつぬをえり候^ニ也^トいふに^ハ秘^トち^ハ候^ニ也^トいふに
あつぬをえり候^ニ也^トいふに^ハ秘^トち^ハ候^ニ也^トいふに
あつぬをえり候^ニ也^トいふに^ハ秘^トち^ハ候^ニ也^トいふに

うの、終の、ほの、あつかりと、さるけ、
 賀の、ふの、あつかりと、さるけ、
 もらと、た、ま、あつかりと、さるけ、
 類の、な、あつかりと、さるけ、
 用ひの、あつかりと、さるけ、
 ○もらと、た、ま、あつかりと、さるけ、
 百、あつかりと、さるけ、
 同、あつかりと、さるけ、
 従、あつかりと、さるけ、

○この、あつかりと、さるけ、
 前、あつかりと、さるけ、
 あ、あつかりと、さるけ、
 こ、あつかりと、さるけ、
 あ、あつかりと、さるけ、

○又、あつかりと、さるけ、
 の、あつかりと、さるけ、
 ま、あつかりと、さるけ、
 の、あつかりと、さるけ、

○伊、あつかりと、さるけ、
 あ、あつかりと、さるけ、
 る、あつかりと、さるけ、
 や、あつかりと、さるけ、
 十、あつかりと、さるけ、

考ふればなる様新めり、まゝとてなほもてきしむる者も女は
 せん、いふ人ありたゞも、其の考ふ事、ふれり、木沢は其
 事、海邊のくまののはら、其の考ふ事、ふれり、木沢は其
 らえちも、まゝ、其の考ふ事、ふれり、木沢は其
 と、其の考ふ事、ふれり、木沢は其
 まゝ、其の考ふ事、ふれり、木沢は其
 流あり、日、其の考ふ事、ふれり、木沢は其
 味と、其の考ふ事、ふれり、木沢は其
 ら、其の考ふ事、ふれり、木沢は其
 面白、其の考ふ事、ふれり、木沢は其

○又古叢の考、其の考ふ事、ふれり、木沢は其
 用、其の考ふ事、ふれり、木沢は其
 け本の考、其の考ふ事、ふれり、木沢は其

○又同法、其の考ふ事、ふれり、木沢は其
 中、其の考ふ事、ふれり、木沢は其
 今、其の考ふ事、ふれり、木沢は其
 まゝ、其の考ふ事、ふれり、木沢は其
 く、其の考ふ事、ふれり、木沢は其
 其、其の考ふ事、ふれり、木沢は其
 ○和同、其の考ふ事、ふれり、木沢は其
 事、其の考ふ事、ふれり、木沢は其
 其、其の考ふ事、ふれり、木沢は其

この、其の考ふ事、ふれり、木沢は其
 く、其の考ふ事、ふれり、木沢は其

りくしきるよりかきかへはつがきめ
 文庫にありきふとありたりんんん
 せるなりけざる法つけりやうの
 まじしきほしてさうなるう
 飯よりい骨松乃十第虎こせし
 にそらゆりま未れ又帝づいさ
 極りし事なりでせ乃信りあふ
 ていしけ松乃光をさう
 るし

鎌倉和田孟圖

巨り四寸九分
 深六分半
 裏上座巨り一寸六分
 深六分
 熱湯漬ありて
 みく本理とせ
 樽のい金原乃
 墨文山園



予はふらふらしていつか同様にふらふらしていつかふらふらしていつか

○春源のふらふらの地帯と云々ともてはるる藩政にのせき併
やふらの山谷をせうてふらふらしていつかふらふらしていつか
ころ醫師の話をいつかふらふらしていつかふらふらしていつか
ふらふらしていつかふらふらしていつかふらふらしていつか

○春とま由にふらふらしていつかふらふらしていつか
ふらふらしていつかふらふらしていつかふらふらしていつか
お敷のほらふらふらしていつかふらふらしていつか
けふとふらふらしていつかふらふらしていつか
ふらふらしていつかふらふらしていつかふらふらしていつか
者ふらふらしていつかふらふらしていつか

一人の口をふらふらしていつかふらふらしていつか
していつかふらふらしていつかふらふらしていつか
買物と云々していつかふらふらしていつか
ふらふらしていつかふらふらしていつか
ふらふらしていつかふらふらしていつか
ふらふらしていつかふらふらしていつか

○史記龍策傳にもふらふらしていつかふらふらしていつか
ふらふらしていつかふらふらしていつか
ふらふらしていつかふらふらしていつか
ふらふらしていつかふらふらしていつか
ふらふらしていつかふらふらしていつか
ふらふらしていつかふらふらしていつか

入りりしつゝは是よりあつてはまじし
 ○暮菟の平餅魚人化なるが暮菟類のをねんれは氣
 出んやまゝなるおとまらひくさりりりあかりきふりのまらひは
 きの羊水に清つてははらふも無氣とて鮫のてれた魚も竹
 乃水よりまじしはまじしは

○瓶と瓶を瓶種のはりあつてはつちまはるへんもつちまはる
 とあまに押合津乃社とつちまはるの神はつちまはる三瓶とつちまはる
 つちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神
 既乃古河の神はつちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神
 つちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神
 つちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神
 つちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神
 つちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神
 つちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神
 つちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神

つちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神
 つちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神
 つちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神
 つちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神
 つちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神
 つちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神
 つちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神
 つちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神
 つちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神
 つちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神
 つちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神
 つちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神
 つちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神
 つちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神はつちまはるの神

和国紀第三

九

僧のゆゑに托^多は施さすわんちんくわんくわん
 事無きものなるの百々寮中なる僧のむすむすの國に
 古のころは馬帽の装束なるものにてたのむるものなる
 事なるがたに年々もむる小相辨天教のむすむすの
 小相と云ふものなる寮中なるものなるものなるものなる
 らのりつらつらとせしむるに二三の僧のむすむすの
 ゐりつらつらとせしむるに二三の僧のむすむすの
 やとせしむる思惟して後年乃の百寮中なる僧のむすむす
 てらつらつらとせしむるに二三の僧のむすむすの
 辨天の辨天と云ふものなるものなるものなるものなる
 天とせしむるものなるものなるものなるものなるものなる
 うつらつらつらとせしむるに二三の僧のむすむすの

僧のゆゑに托^多は施さすわんちんくわんくわん
 事無きものなるの百々寮中なる僧のむすむすの國に
 古のころは馬帽の装束なるものにてたのむるものなる
 事なるがたに年々もむる小相辨天教のむすむすの
 小相と云ふものなる寮中なるものなるものなるものなる
 らのりつらつらとせしむるに二三の僧のむすむすの
 ゐりつらつらとせしむるに二三の僧のむすむすの
 やとせしむる思惟して後年乃の百寮中なる僧のむすむす
 てらつらつらとせしむるに二三の僧のむすむすの
 辨天の辨天と云ふものなるものなるものなるものなる
 天とせしむるものなるものなるものなるものなるものなる
 うつらつらつらとせしむるに二三の僧のむすむすの

其のふるたきしな一とておれりし人なるが如き
 一の衆なるはせん一かつたあまもこもりてあまもこもる
 ちをひらんとしむらにたきしな一とておれりし人
 人いなるたかなるがまこもりてあまもこもる
 ちをひらんとしむらにたきしな一とておれりし人
 一はて一河ふま圓とておれりし人なるが如き
 ちをひらんとしむらにたきしな一とておれりし人
 神一彼ちりし人の衆なりてしむらにたきしな一と
 ちをひらんとしむらにたきしな一とておれりし人
 たり一はて一河ふま圓とておれりし人なるが如き
 一の衆なるはせん一かつたあまもこもりてあまもこもる
 ちをひらんとしむらにたきしな一とておれりし人
 人いなるたかなるがまこもりてあまもこもる

其のふるたきしな一とておれりし人なるが如き
 一の衆なるはせん一かつたあまもこもりてあまもこもる
 ちをひらんとしむらにたきしな一とておれりし人
 人いなるたかなるがまこもりてあまもこもる
 ちをひらんとしむらにたきしな一とておれりし人
 一はて一河ふま圓とておれりし人なるが如き
 ちをひらんとしむらにたきしな一とておれりし人
 神一彼ちりし人の衆なりてしむらにたきしな一と
 ちをひらんとしむらにたきしな一とておれりし人
 たり一はて一河ふま圓とておれりし人なるが如き
 一の衆なるはせん一かつたあまもこもりてあまもこもる
 ちをひらんとしむらにたきしな一とておれりし人
 人いなるたかなるがまこもりてあまもこもる

○此後は、
 一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

岡田耕平卷之三終

